

あけのほし 2015 年 9 月

「戦争と聖書」②

菊田行佳

「そこで、イエスは言われた。『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。』」
(マタイによる福音書 26 章 52 節)

「イエスは言われた。「しかし今は、財布のある者は、それを持って行きなさい。袋も同じようにしなさい。剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。そこで彼らが、「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」と言うと、イエスは、「それでよい」と言われた。」
(ルカによる福音書 22 章 36,38 節)

戦争を行う時、そこには必ず「正義」があります。あからさまに、隣国の領土や資源が欲しいから武力を用いて奪うのだということは言わないでしょう。そこには、何かしらの大義名分が存在しています。

現代では、国連憲章によって国際紛争の解決を図る手段として、戦争を行うことは禁止されています。唯一認められているのは、国連の強制措置以外には自衛権を行使する時のみです。ですから、すべての国が自衛に徹していれば、決して戦争は起こらないはずですが、しかし、それをそのまま信じることは出来ないでしょう。自衛をするだけならそんなに巨大な軍力は必要ないと思える軍隊を有している国はたくさんあります。そして、自らの国益を守ることも自衛なのだとして、遠い海外に軍隊を送って他国を制圧することも自衛権の行使としてまかり通っています。そこには、一国の偏った見方によって形成された「正義」の遂行が存在しているのだということです。第二次世界大戦中、日本は正義の名の下に隣国を侵略して行きましたし、一方でアメリカは justice の名の下に無差別爆撃や原爆を投下しました。これからも大規模な戦争は、すべて「正義」の名の下に行われるでしょうし、すべて自衛権の行使として発動することでしょう。

このような私たちの置かれている世界の現実に対して、キリスト教の聖書は、どのような示唆を与えるのでしょうか。今回は旧約聖書から見ましたが、今回は新約聖書の方から見てみたいと思います。

今も隣国との紛争が絶えないパレスチナの地に、イエスが誕生したのは 2015 年前です。その頃、この地域はローマ帝国によって植民地、あるいは属国にされていました。帝国の一方的な搾取にあえぐ民衆は、経済的にも、そして文化的、精神的にも圧迫されて不満が増大していました。イスラエルの人々は、人間が人間を支配して、奴隷のように従属させることを、認めることは出来ませんでした。世界の主権者はこの世界を造られた神以外にはいません。そしてその神がすべての人を平等に造ったのだと信じていましたので、神が持つ主権は、一部の人間が独占的に、自己目的のために用いるのではなく、民の代表者が一人一人の民に対して、公平に用いなければならないと考えていました。

どうでしょうか。この考え方は間違っているのでしょうか。神が与える平等な権利というところで引っかかるかもしれませんが、実はアメリカも日本もこの天賦人権説を憲法に採用しています。私も、この考え方は正しいと思いますし、これこそ普遍的な「正義」ではないかと信じています。

当時のイスラエルの人々も同じように、この神の下での平等という正義を心から信じていましたし、それを力づくで奪っているローマ帝国は正義を犯していると考えました。そして、そのような不正義によって世界を支配する帝国は、神の意志に逆らっているのだと結論づけたのです。

私はここまでは正しいと思うのですが、しかし問題はその後です。イスラエルの人々の中から、神の正義を帝国の支配に対して遂行するために、武力を用いてでもやるべきだと考える人々が現れました。合法的に法律に訴えたり、選挙によって政権を変えることが出来ない状況においては、唯一、間違った権力者を除くためには、武力に訴えるしかないと考えたのです。

イエスが生まれた数年後、イエスの出生地であるナザレの村のすぐ近くにあるセッフォリスという町では、大規模な反乱が起こり、帝国による凄惨な掃討作戦が行われたことが資料に残っています。そしてそのような反乱、テロ活動は度々起こり、やがてイスラエルの人々の世論は、帝国と全面戦争をすることに傾いて行き、イエスの死後30年後にユダヤ戦争を起こしました。多くの犠牲者を出した戦争は、結局、帝国からの独立を果たすことは出来ませんで、それどころか国としては、この地上から消えてしまいました。

イエスも、世界の主権者は神以外になく、すべての人間が神によって愛されているのだと考えていました。ですから、ローマ帝国の人々が、同じように神に愛されている人を粗末に扱い、一人前の人間として関わらないことは、神の正義に反していると考えたのです。

しかし、ここから先が、当時のイスラエルの多くの人々とは違っていました。確かに、帝国は間違っています。その不正義なおり方を改めて、本来の神の意志に立ち帰るべきです。ただ、その間違った状態のローマ帝国の人々に対して、武力を用いて戦っても、真の勝利は望めないのです。武力によって、たとえ一時的に勝利を得られたとしても、それは本当の意味での解決にはなりません。人間が皆、天の下ではみな平等で、決して犯してはならない権利を有しているのだと認め合うようにならない限り、争いが止むことはないのです。武力によって得られる勝利は、人々の上に君臨する者が入れ替わるだけです。いくら目的が正しかったとしても、それを為し遂げる手段や方法が間違っていたのなら、結局、それによって得られる結果も、間違いに行き着くのだということです。

確かにイエスも、自衛権の行使として、必要最低限の武力を持つことを認められました（冒頭の聖書箇所）。しかし、それは神の御意志が世界すべてに広まるまでの中間期の間のことだけです。すべての国や人々が武器を捨てて、対話によってお互いの権利を認め合うようになることこそ、目指すべき目標です。今回は武力に拠ってではなく、「言葉」によって世界に平和をもたらすことを述べたいと思います。